Paris

随筆どんなの旅

森田たま著

鹿島出版会

随筆をんなの旅

検印廃止

定価　五八〇円

発行　昭和四十二年六月十五日　©

著者　森田たま

発行者　河相全次郎

発行所　鹿島研究所出版会
東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話　東京（五八二）二二五一
振替　東京一八〇八八三

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　和田製本工業株式会社

書棚分類　随筆

目次

王室法官勲章　三
バスに乗つて　一七
西のホテル、東のホテル　四四
二度目の旅　五五
ネバサ号報告　五八
一輪のコスモス　六三
初會・再會　六六
食味は変る　七一
流行と反逆　七七
人生の暮れ　八〇

はじめての自動車旅行　八五
旅情ある宿　九三
ふるさとの花　九七
いのち　一〇二
生き死には　一〇八
千枝子さんへの手紙　一一三
尾崎さんの笑顔　一一〇
サカナの阿部さん　一一四
小宮先生　一一七
安倍先生のこと　一一四
梅松會など　一一八
風流茶杓けづり　一四一
漱石先生のこと　一五四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生れた国の言葉　一五七
火　鉢　一六一
もう一つの金メダル　一六三
日本の美しさ　一六六
手　毬　一六九
名物あり　一七一
いくらくれる　一七五
お化け　一七九
きもの博士の千家夫人　一八三
衣食住　一八六
かんざし　一九〇
絵　絣　一九三
ボロ家の明け暮れ　一九七

晩春一夜　二〇三
春の野だて　二〇五
南極の氷　二一五
恋ときもの　二二二
厨房の友　二二六
フライパン　二二六
キャセロール　二三〇
心のお医者　二三五
ふるさと十二ケ月　二四五
一月一日　二四五
吹雪の味　二四八
三月の花　二五二
土　二五五

ライラックの町　二五九
ガス　二六二
七月の旅　二六五
海水浴　二六九
駒ケ岳　二七二
登別の秋　二七六
はつ雪　二七九
烏　二八二
あとがき　二八七

装幀　著者

随筆をんなの旅

王室法官勲章

一

パリから七百キロ、ピレネー山麓のポーといふ町へ行つた時のことを記さうと思ふ。

参議院といふところには、毎とし議員の若干を海外へ派遣する制度があり、自分にもその順番がきてゐるときいた私は、今年の旅行を去年のうちから志願しておいた。いま私は国語問題を手がけてゐるが、それについて一度ヨーロッパの当事者たちと會つてみたい、これは在外大使館の文化アタッシェに調査してもらへばそれでもすむことだけれど、やつぱり生きた人たちに會つて、なまの話をききたい、そこには書類では得られない何かがあるだらうと思はれた。

で、私は強くヨーロッパ行きを志望したのだが、今年の国會は紛糾して會期が長びき、會期中に出かけるといふのは大そう困難なことであつた。しかしぐづぐづしてゐると會ふ約束の相手がみんな、休暇で地方へ行つてしまふ。私は事情を陳情してやうやく一人だけ先きへ出発させてもらへることとなつた。羽田の空港へ渉外課の方が見送りにきて私に告げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「先生は欧米班第一班ですが、仏日友好議員連盟の招待がありますから、九月十日から二十日までは必ずパリにゐて下さるやうに。それから日仏議員連盟の會員になつて頂くことにきまりましたから、御承知下さい。會費は毎月歳費の中からさし引かせて頂きます」

何が何だかわけがわからなかつたが、とにかく万事よろしくと頼んで、参議院日仏友好議員連盟名簿といふのを受取り、飛行機に乗つた。その結果が自分一人でなら絶対に行くことはあるまいと思はれる南仏のポー市訪問となつてあらはれたのである。毎としかういふ招待があるとはかぎらない。私はまつたく思ひがけない幸運に恵まれたのだつた。

九月十三日、オルリー空港からポー市へむかつて飛ぶ。十二時四十分に出て二時二十五分に着いた。所要時間二時間足らずである。一行は団長の河野副議長夫妻、自民党から栗原、中上川、自分の三人に、社会党が羽生、柳岡の二氏、民社高山氏といふ顔ぶれで、他に渉外や事務局からの随行が三人、大使館から加川参事官、林書記官、南条通訳がついて、フランス側からは事務局書記のペラン女史、上院議員が二人といふかなりの人数で、そのうへ河野夫人と中上川あきさんと私の三人は着物を着てゐたから、ポーの空港へ着いた時はみんなの注目の的となつたやうだつた。

パリは晴れてゐたのにポーは朝のうち雨がふつたとかで曇り空である。男の人たちは空港からすぐ貸切バスで、国営の石油會社やアルミニューム會社などの視察に出かけたが、私たち女

連中はまつすぐホテルへ行かせてもらつた。前日、パリから自動車で二時間ほどのシャトレーヌといふところへ行き、硝子工場の見学だといふので、あの華麗なバカラの硝子かと思つてよろこんで行つたら、何とこれはすばらしく大きな板硝子の工場で、鉄かぶとをかぶつて二キロも三キロも歩かねばならぬとわかつてがつかりしたり、帰りの自動車はあとのスケジュールのために百五十キロも飛ばしたりした疲れが、まだからだにも気持にも残つてゐたため、石油會社は勘弁してもらつたのである。

ホテル・ド・フランスといふ宿は、町の丘の上にあつた。この町はアンリ四世の生れたところで、その家来のベルデナットといふ人がスウェーデンへ行つて、のちにスウェーデン国王になつたといふ由緒ある土地だけに、ホテルも大そう古風で、はいつて左側がフロント、正面つきあたりに何か舞台のやうなものがあり、大きな額らしいのがかかつてゐるのだが、うす暗くてよく見えない。右側がロビイで、その中を通つてれいの鳥籠のやうなエレベエタアに乗り、二階の客室へ案内された。

部屋へはいるなり、慾も得もなくベッドの上にたふれた。十日以来、見学、訪問、レセプション、オペラ見物、夜會といふ風に、びつしりつまつた強行軍スケジュールで、へとへとになつてゐたからだつた。しばらく手足をのばさうと思つて横になつたのが、いつかうとうと眠つてしまつた。眼をさました時はあたりが暮れかけてゐた。

石でつくつた三尺に四尺ほどのちひさなバルコニーへ、小椅子をひきずつて行つてあたりのけしきを眺める。ホテルの建つてゐる丘は相当高いところであるらしく、一望のもとに町の殆ど全地域とおぼしい広さが見渡せる。相変らずくもつてゐて、左手に連つてゐる筈のピレネー山脈は、灰色の空のいろで塗りかくされてゐるが、町の起伏は暮色の中にくつきりと浮んで見える。ホテルの横の道路の一部が、小ぢんまりした見晴らし台になつてゐて、よく見るとそこへケーブルカーが上つてきてゐる。

実に静かな町であつた。ときどき自動車が通らなくもないが、騒音といふものが殆どきこえて来ない。黒い犬を連れた紳士がひつそりと通つて、見晴らし台へ行つて石の柵にもたれて町を眺めてゐるのが、まるで影絵のやうである。見晴らし台の人影もまばらで、みんな唖かと思はれるほど話し声もきこえて来ない。ケーブルカーは深い樹立のかげにかくれて下つてゆくが、終点はどうやら汽車の停車場でもあるらしく、樹立のあひだから遠く下の方にちらちらとレールが見え、シグナルが青く光つてゐる。

飽きずに私は暮れてゆく町を眺めてゐた。やうやく灯のまたたきはじめた町の中央に、高く四角い塔が一つそびえてゐるのは教會であらうか。尖頭を持たない形から推すとロマン風のもののやうに思はれる。それともつと古い時代のものか、——そんな事を考へてゐると、不意に珍しく人の声がした。

二十代の終りか三十代になつたかと思はれるやうな夫婦が、七八つの女の子と、五つくらゐの男の子を連れて、道路の左側の方から歩いて来たのだつた。女の子は白いスェーターを着て、それがあたりの夕暮れの色を一そう濃くしてゐるやうに見えた。四人はたのしさうに笑ひながらバルコニーの下を通つて、見晴らし台の方へ行く。

オーイと何か呼びかけるやうな声がして、それから早口に何かしやべる。いつのまにかケーブルカーが上つてきてゐて、開けた昇降口に起つてゐた男が呼びかけたのだつた。家族連れは見晴らし台へ行きかけた足をとめて、やつぱり早口に返事をする。たぶん、乗るのかと問はれ乗らないと答へたのであらう。ケーブルカーはドアをしめ、ベルを鳴らして下りて行く。同時に汽車のはいつてきたらしい響きがして、シグナルが赤くかはつた。夕闇が重たく町の上に降りて、きらきらと輝きを増した灯が、まるで湖の底に星を埋めたやうに、ひつそりと静けさを深めてゐる。——夜の宴會は九時からであつた。

ポー市主催の晩餐会で、場所はカジノであつた。カジノといへばモナコによりないやうに思つてゐたが、フランスでは大ていの町にカジノがある。さうしてその場所は公の行事に使はれることもすくなくはないらしい。平屋だての灯の明るい會場で、今夜は一般の入場者をことわつたのか、それとも時間をずらしてあるのか、場内に殆ど人影はなく、私たちは紅いじうたんを踏んで、右手のひろい部屋に通された。壁にそうてコの字形に食卓がしつらへてあり、前方

は窓際までひろびろと紅いじうたんを敷きつめた場所が、椅子一つなく空いてゐる。ダンスでもやるのだらうか、それにしてはピアノも何もおいてないがと思つたりした。

食事がはじまると、――この食事は、白、赤のぶだう酒とシャンパン。ホアグラ、魚、肉、チーズ、木苺クリームといふ献立で大そうおいしかつた。木苺は野苺ともいひ、イタリアでもよく出てきたが、日本の野生のものとちがつて、草苺を小粒にしてあたまをとがらせたやうな形で、味は重たくもちもちしてゐる。イタリアやフランスでも最高級のくだものだといふことで、アヴァロンのホテルポストの木苺のお菓子はフランス一だといふ話もきいたが、日本人はやつぱり日本の苺の方にうちはをあげるやうである。――食事がはじまるとまもなく、右手の入口から、黒のベレー帽、紅い上衣、黒ズボンといふいでたちの男たちが二十人ほどはいつてきた。白い靴下には靴のひもが、もやうのやうにまきつけてある。

この地方の民族衣裳だといふことだつた。さうしてこの人たちはこの地方の民謡を四つほど合唱した。晝間はそれぞれ職業を持つて働いてゐる人たちださうである。この合唱隊がひつこむと、今度は十歳ぐらゐの男の子が先頭にたつて手風琴をひきながら、あとに八つぐらゐの少年が自分よりも大きな白い犬を連れてつづき、それから両腰にフットボールほどの鈴をさげた少女、民族衣裳をつけた高校生くらゐの男女二十人がはいつてきて、民族舞踊を見せてくれた。みんな実にうまい。

大きな白い犬は最後までおとなしくすわつてダンスを見てゐた。ピレネー山麓の羊飼ひの犬ださうで、犬も何か芸をするのかと思つたらさうではなく、ただピレネー地方の気分を出すために連れてきたものらしかつた。

民族舞踊団が退場すると、つぎにあらはれたのは神父さまのやうな服装をした一団である。大きな酒壜を抱へたのや、聖書のやうな印刷物を持つた人がある。スケジュールの中に、団員に対するジュランソン王室法官勲章の授与といふ一章があつたが、まさかこれがさうだとは思はなかつた。われわれは一人一人神父団の前に呼び出され、酒のバイブルの聖句をきかされ、紫のタフタでつくつた勲章のレイを首からかけられ、銀の盃の形をした勲章に白ぶだう酒を、酒壜を抱へた神父さまからついでもらつて、それを飲み干すのが儀式である。

宴会は十一時すぎに終つた。フランス人はさすがにしやれた事をする、日本の勲章は何にもならないが、この勲章はあとで灰皿にもなると話しあひながら、私たちは人が住んでゐるとも思はれない静寂の町をとほつて、ホテルへかへつてきた。

二

ピレネー山麓のバスク地方を、二日にわたつて歩きながら、遂ひにピレネー山脈を見られなかつたのは何とも心残りのことであつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com